

日本語教育史研究会2019年度研究発表会

長谷川雄太郎研究・その3

—『日語入門』初版の成立過程に関する—考察—

(写真：長谷川家ご提供)



中村 重穂

0. 発表前史

- 本発表「長谷川雄太郎研究・その3－『日語入門』初版の成立過程に関する一考察－」
- その0：「長谷川雄太郎研究序説－『日語入門』諸本校異に基づいて－」
『北海道大学留学生センター紀要』第19号、2015（→中村2015）
- その1：「長谷川雄太郎研究－『日語楷梯』と『日語入門』草稿の校合に基づいて－」
『北海道大学国際教育研究センター紀要』第20号、2016（→中村2016）
- その2：「長谷川雄太郎研究・その2－日本語史的観点から－」
『北海道大学国際教育研究センター紀要』第21号、2017（→中村2017）

1. 長谷川雄太郎略歴



- 1865(慶應1)年4月30日、群馬県出身
- 奈良県に移住し、文武館(現・十津川高校)にて学ぶ。
- 1888(明治21)～1894(明治27)清国滞在
- 1897(明治30)3月～1903(明治36)年夏まで清国広州同文館日語教習
- 1901(明治34)年2月、『日語入門』刊行
- 1904(明治37)年3月4日死去
(写真：長谷川家ご提供)

2. 長谷川雄太郎に関する先行研究

- 池上1985a/b
- 吉岡2000
- 吉岡2002
- 谷口2011
- 劉2015
- 魏2016
- 続2016

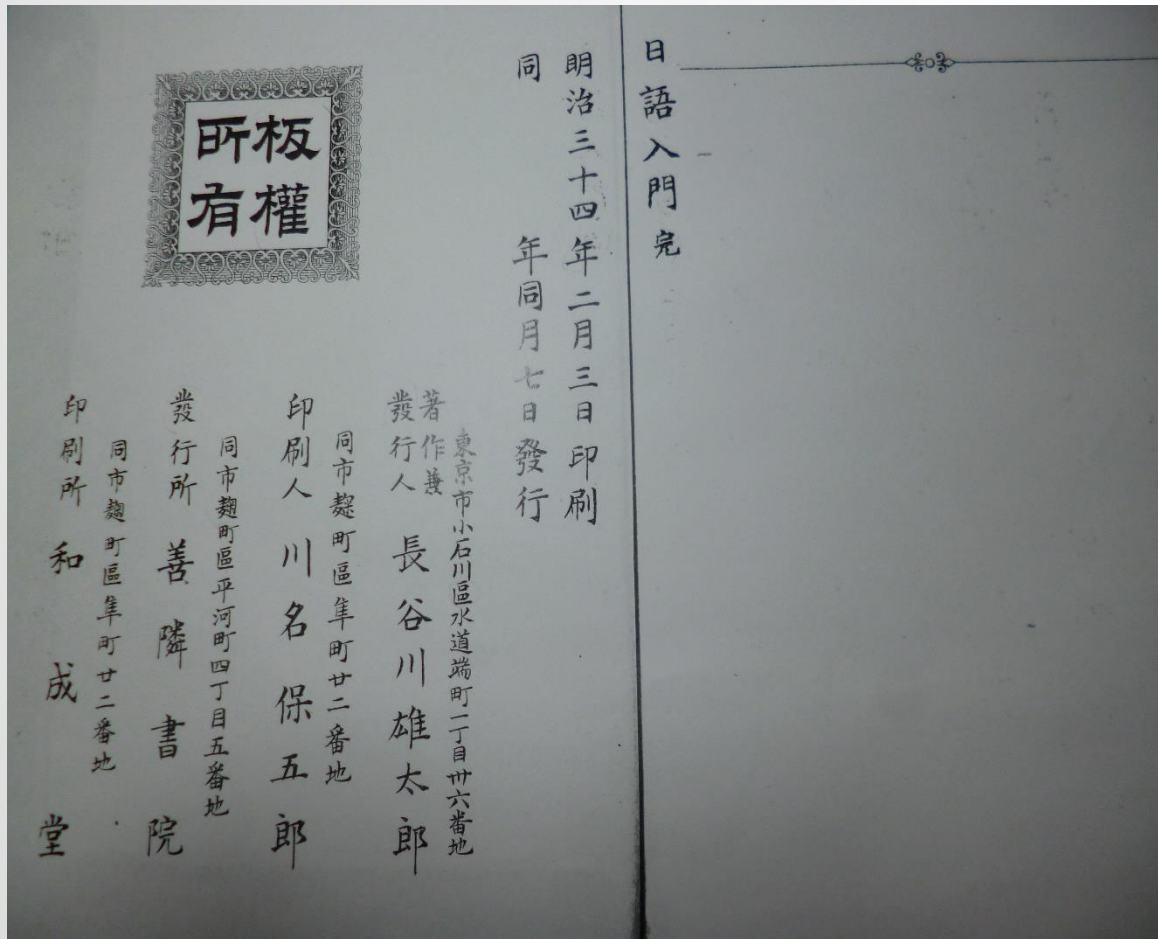
→明治期日本語教育史研究に於ける

“知る人ぞ知る”存在

(写真：長谷川家ご提供)



3. 問題の所在



- 『日語入門』→1901(明治34)年2月7日發行(以下「初版」とする。)
- 初版所蔵先：
 - ①長谷川家(神奈川県横浜市)
 - ②東京都立中央図書館特別文庫室
実藤文庫(東京都港区)
- 新確認：
 - ③東京外国語大学附属図書館

・『日語入門』所蔵先

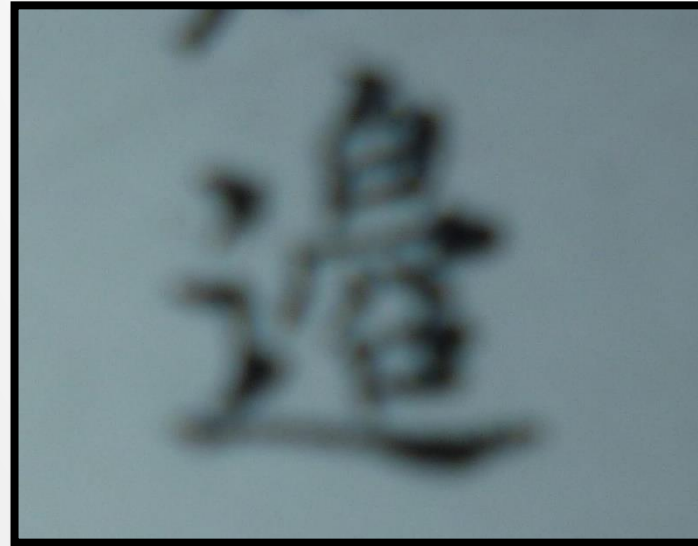
	所蔵先	版	発行年月日
1	長谷川家	(初版)	明治34年2月7日
2	東京都立中央図書館特別文庫室実藤文庫	(初版)	明治34年2月7日
3	東京外国語大学附属図書館	(初版)	明治34年2月7日
4	北海道大学附属図書館札幌農学校文庫	再版	明治37年5月25日
5	中村重穂(発表者)	四版	明治38年6月25日
6	富山大学附属図書館梶井文庫	六版	明治40年2月20日

・字形の相違例（1）：「邊」

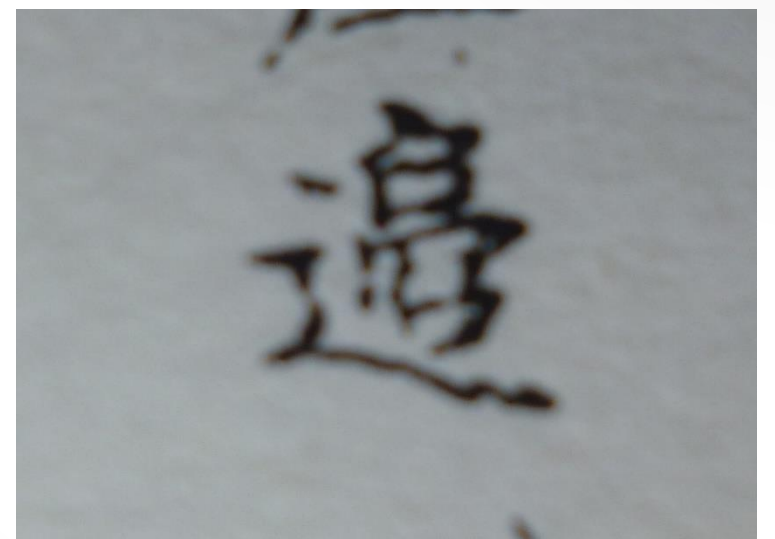
東京外大本



長谷川家本

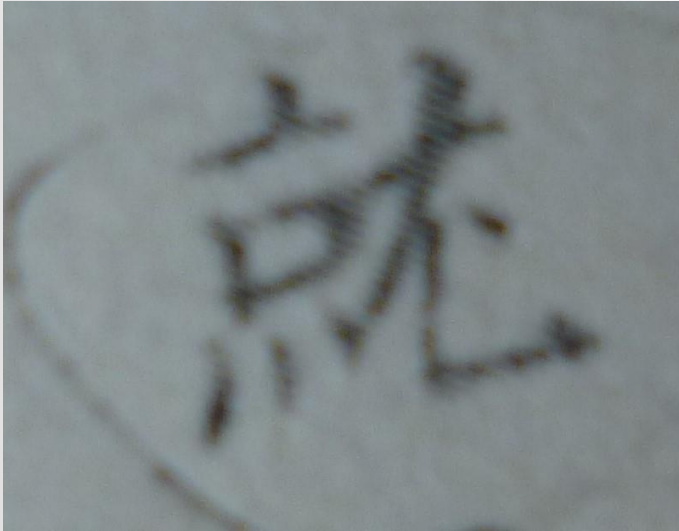


実藤文庫本

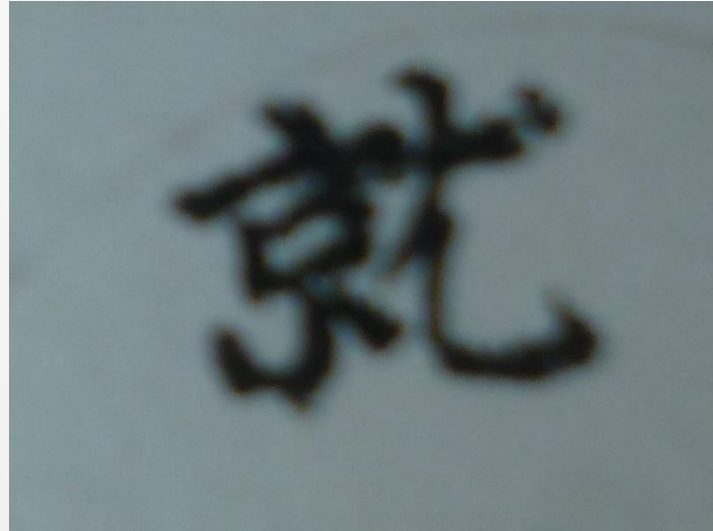


・字形の相違例（2）：「就」

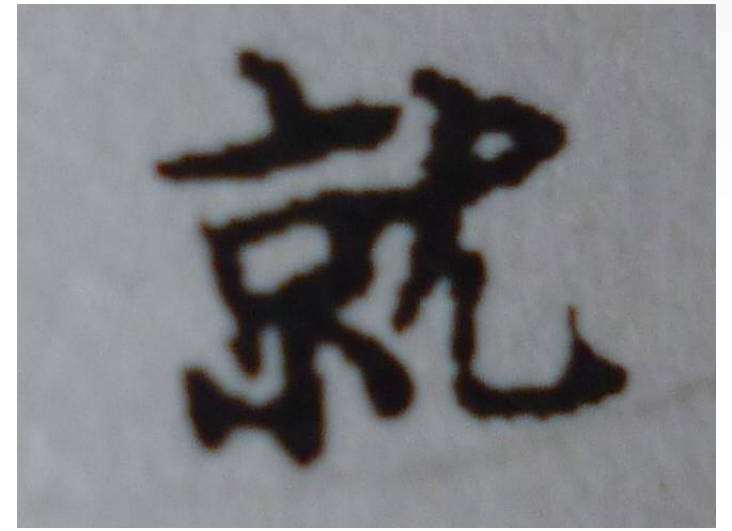
東京外大本



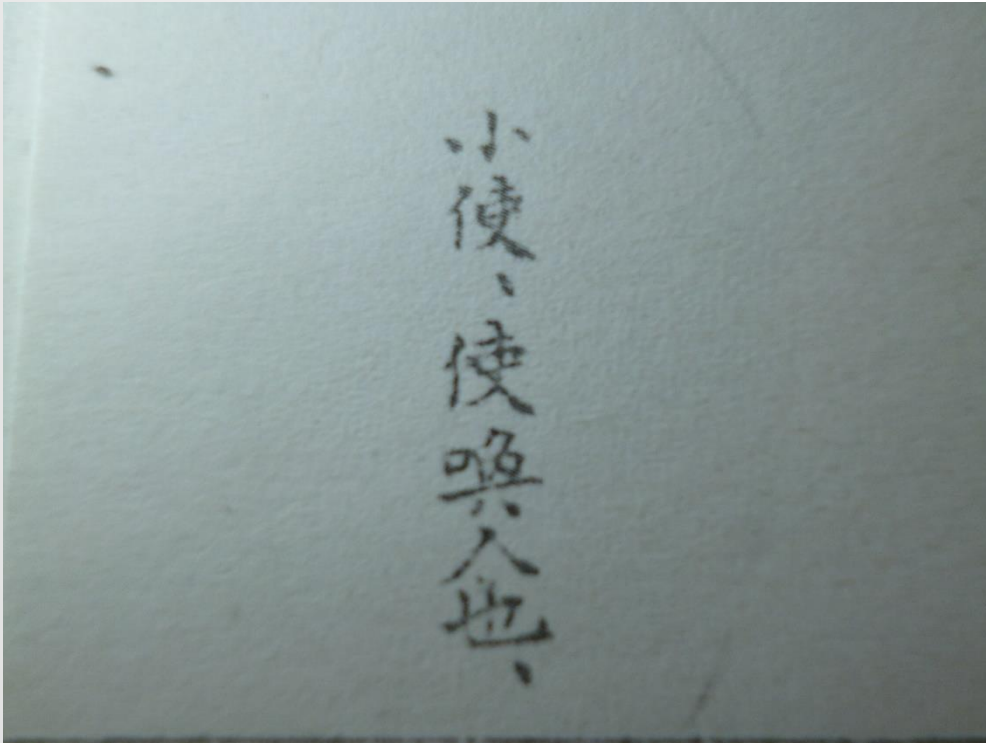
長谷川家本



実藤文庫本



・文の脱落例



- ・ 110葉丈夫欄外注記

→東京外大本には存在

長谷川家本、および実藤文庫

本には存在せず。

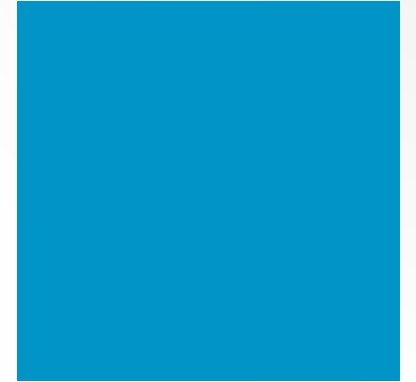
4. 本発表の目的

- 3冊の初版に於ける相違が生じた原因について ;
 - ①校合を行った上で
 - ②当時の印刷技術の状況なども勘案しつつ『日語入門』初版の成立事情について考察する。

→具体的には、3冊が同一日に印刷されたとすればどのような順序で印刷されたのかを推定／復元しようとする事

5. 外大本の書誌情報

- 縦22.8cm×横15.4cm
- 四ツ目綴じ和装本(綴じ糸は交換)
- 表紙色：縹色（右色見本参照）
- 題簽あり、背表紙なしで背の部分に「日語入門」墨書
- 「例言」+「日本仮名字体」+ 本文134葉 + 奥付半葉
- 全90課
- 135葉前半下部に「大正貳年貳月拾九日現在圖書」の印あり
- 表紙裏に1901(明治34)年2月28日付で発行所・善隣書院から寄贈(または受け入れ処理)のシールあり



6. 分析

- 『日語入門』初版の字形 = 3冊とも1字種1字形ではなく1字種多字形

「明治新政権の誕生が一八六八年であり、実際に活字印刷が普及しだしたのが明治一〇年前後である」(横山1992:324)

→『日語入門』も活字印刷。

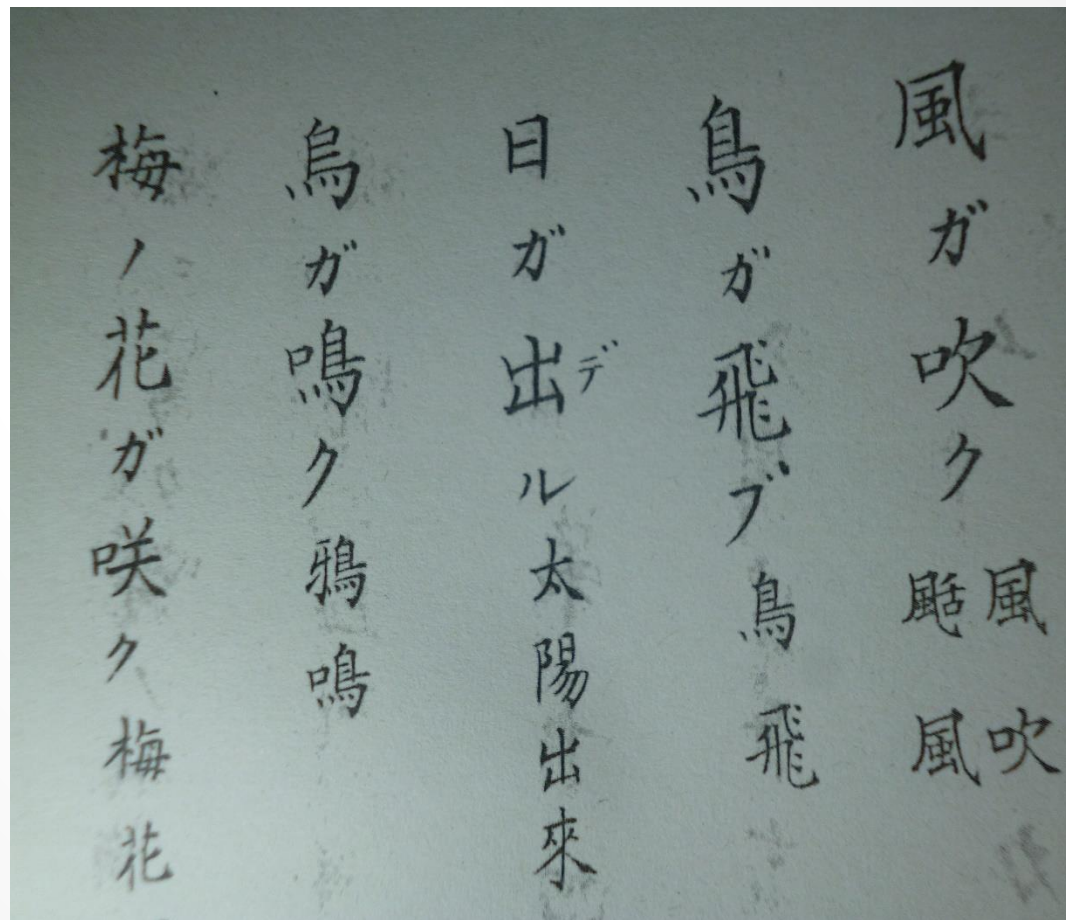
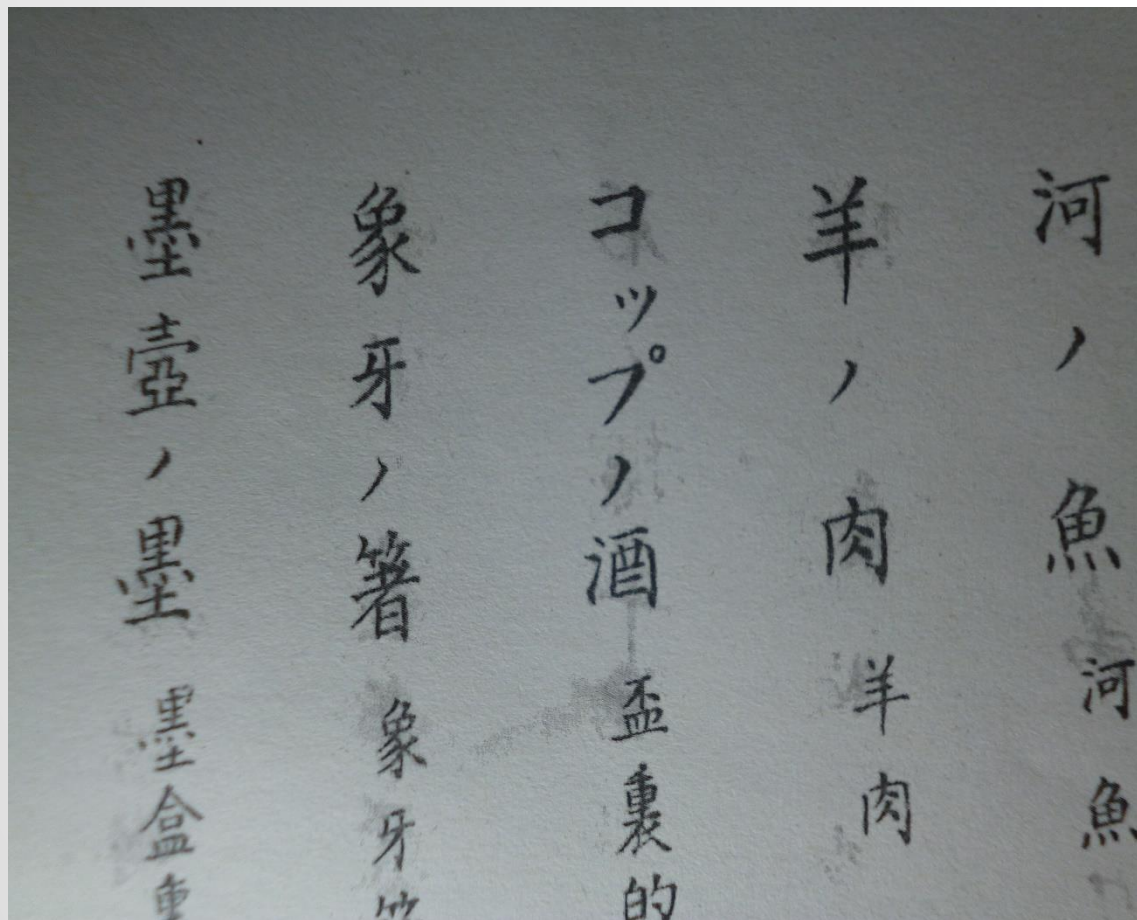
- 1字種多字形であることから考えると鑄造活字／鉛活字ではなく木活字による印刷？

→同一の課に含まれる同一文字の出現箇所による寸法の異なり

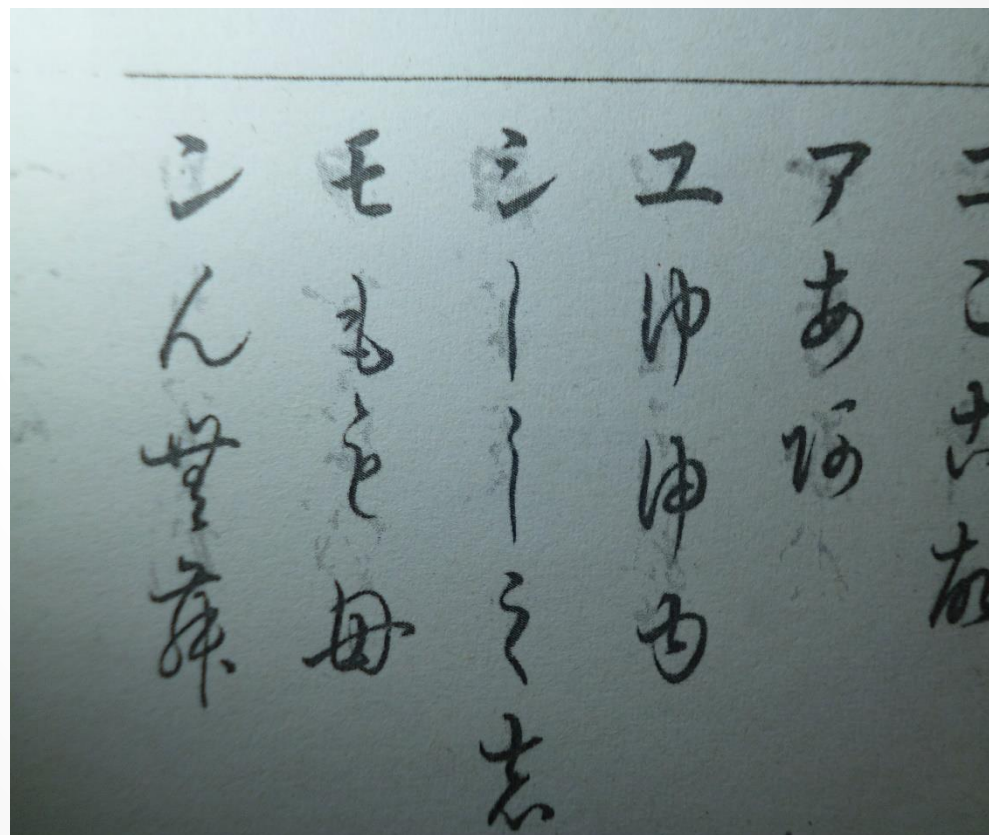
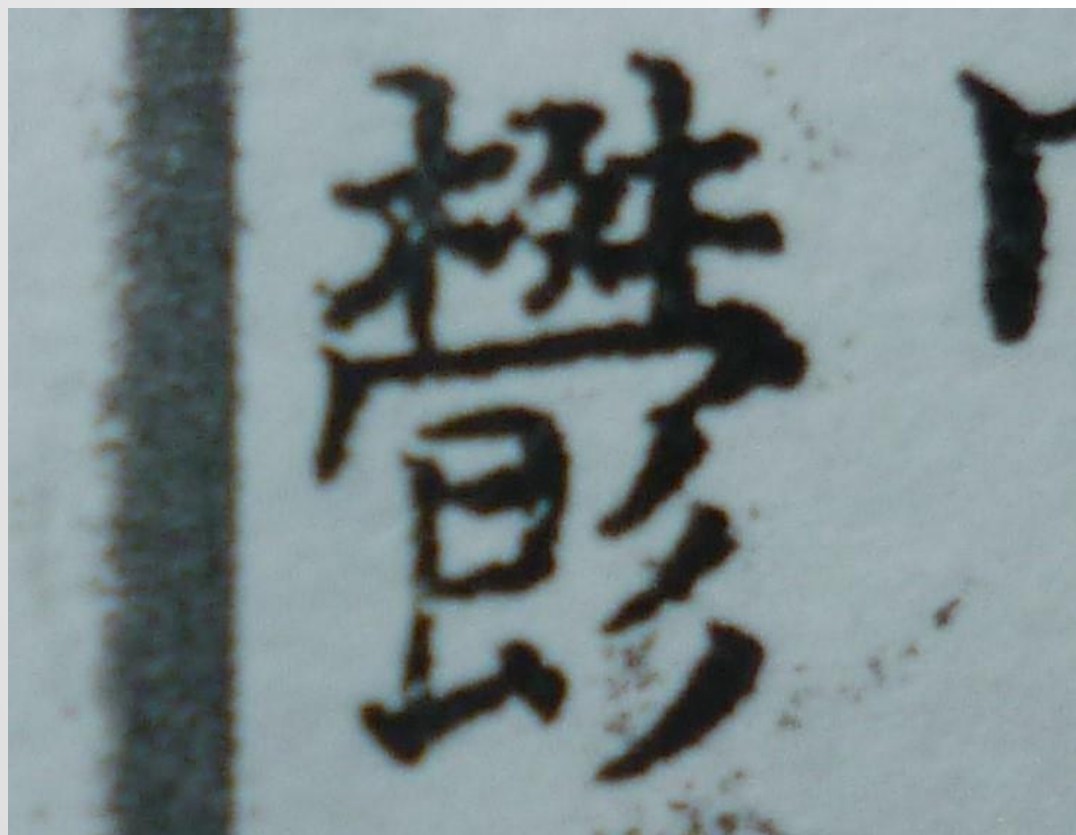
例：第8課「ノ」…0.3cm×0.2cmと0.4cm×0.3cmが混在(次スライド左)

第13課「ガ」…0.6cm×0.4cmと0.6cm×0.5cmが混在(次スライド右)

• 1字種多字形の例



•書体の例



・校合結果

①相違点は、文字のみにとどまらず、語／文の欠落、行位置、約物に

②異字形が認められた字種(異なり字種)は125字

→資料編・表1

③文字・語彙・文の誤植／欠落は、誤字23箇所、濁点脱落11箇所、脱字5箇所、
文脱落2箇所、誤植・行ずれ各1箇所

→資料編・表2

※範囲によって違うがどの読み方も可能なため誤植とは判断しきれないもの5箇所

④約物の誤植・欠落は合計46箇所

→資料編・表3

・『初版』3冊の相違箇所

①『日語入門』初版3冊に出現する相違箇所総数は延べ415箇所

②相違形態分類

- 1.3冊の全てに於いて異なるもの
- 2.外大本と長谷川本が同一で実藤本のみ異なるもの
- 3.長谷川本と実藤本が同一で外大本のみ異なるもの
- 4.外大本と実藤本が同一で長谷川本のみ異なるもの
- 5.外大本と長谷川本が異なり実藤本に脱落があるもの
- 6.外大本のみ記述があり長谷川本と実藤本に記述がないもの

→資料編・表4

7. 明治期の印刷技術

- ・「明治7年頃は活版印刷は普及していなかった。はじめは和綴じ本、本版、木活字であり、1880(明治13)年には板目木版のあとで電気版をとる方法が使われた。こうした技法は昭和初期まで続いたという。」

(田中1999:39)

- ・「〔1903(明治36)年－引用者註〕野村宗十郎が、母型製作者宇佐美豊吉の協力を得て、初めてポイント活字を制作した。」

(田中1999:43)

8. 考察(1)

・『日語入門』初版は鑄造活字ではなく木活字の可能性

…1冊の初版の中で同一文字でも異なった活字で印刷

⇒3冊の同じ初版で同一箇所にも異字形が生じたのはなぜか、という問いは未解決

→資料編表4

資料編表2-2

①長谷川本・実藤本と比較して外大本は特異に字形の異なり大

②外大本が他の初版とは異なる形で印刷

③長谷川本と実藤本の比較では長谷川本に誤植多し

・相違点発生過程推定の手がかり

→外大本に存在するが他の2冊に存在しない文(欄外註記)

①「小使、使喚人也、」(72課・110葉)

②「リ字發聲變做促音 サス、叮也」(78課・118葉)

…印刷職人が活字を組むことを忘れた／怠った可能性

→推定：外大本、長谷川本、実藤本の植字を行った職人が相異

※他の推定：印刷職人は同一でも複数の組版を製作する際に一つの組版のみに①、②を植字

9.小括

- ①『日語入門』初版3冊の相違は印刷職人の違いに帰せられると推定
 - ②印刷職人の異同よりも3種類の組版が3台(複数)の印刷機で別々に印刷された可能性も推定可能
 - ③印刷機の台数と関係なく、同一印刷日の中でタイムラグを伴って印刷された可能性も推定可能
- ※③については、1901(明治34)年2月3日の状況を検証することが困難なため、これ以上の考察は不可能
- * ②については、当時の印刷会社の規模から推定の可能性あり
→実地調査等による検討へ

10.印刷会社和成堂に関する調査

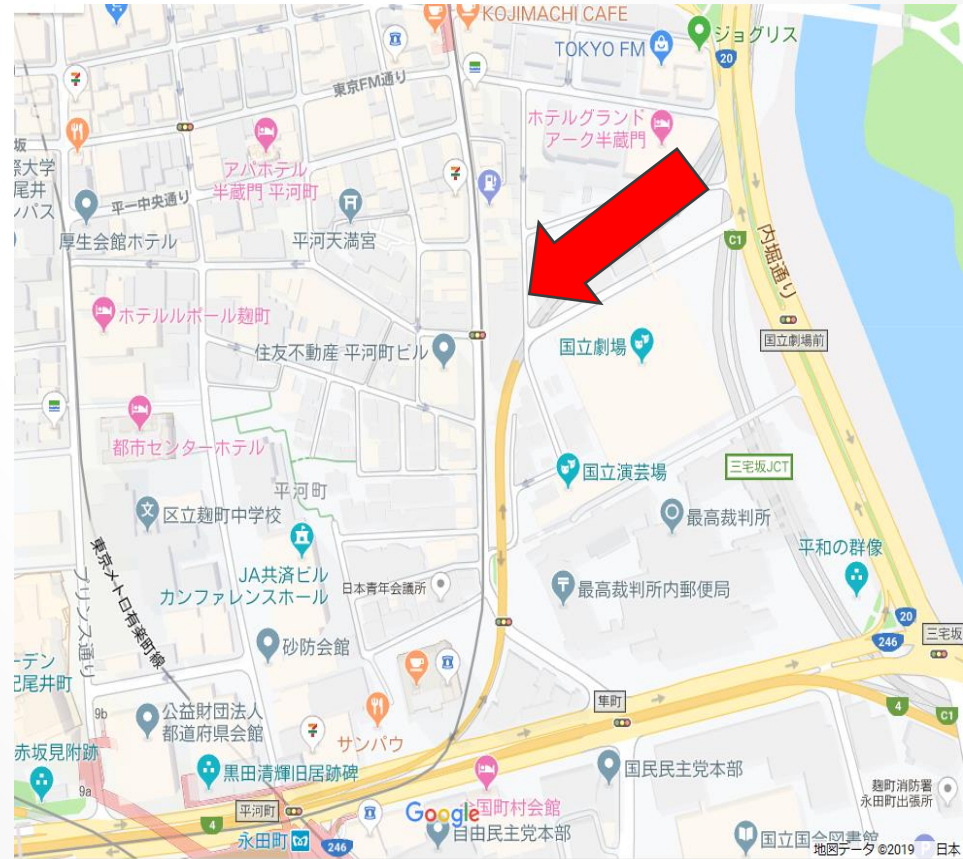
- 所在地：東京市麴町区隼町22番地
 - ＝現住所：東京都千代田区隼町3番16号(「丁目」なし)
- 隼町の区画は明治時代と同一
- 隼町22番地の区画も明治時代とほぼ同一
 - 首都高速道路三宅坂ジャンクション(千代田トンネル入り口)部分のみ削減
- 現在地の状況：住友半蔵門ビル敷地
 - 1983(昭和58)年竣工、地上7階地下1階建てオフィスビル
- 縮尺からの概算：正面約68m、奥行約24m、敷地面積約1,500m²

・和成堂所在地地図

1907（明治40）年、東京郵便局編



GOOGLEMAP



・現在地写真(住友半蔵門ビル)



• 印刷機について

• 当時の印刷機と印刷工場の状況

①「明治33年、1900年つまり20世紀を迎え、外国機も続々と輸入されるようになった。

国内メーカーも増えてきた。…そのころの印刷機は手まわしと動力がけとあった。」

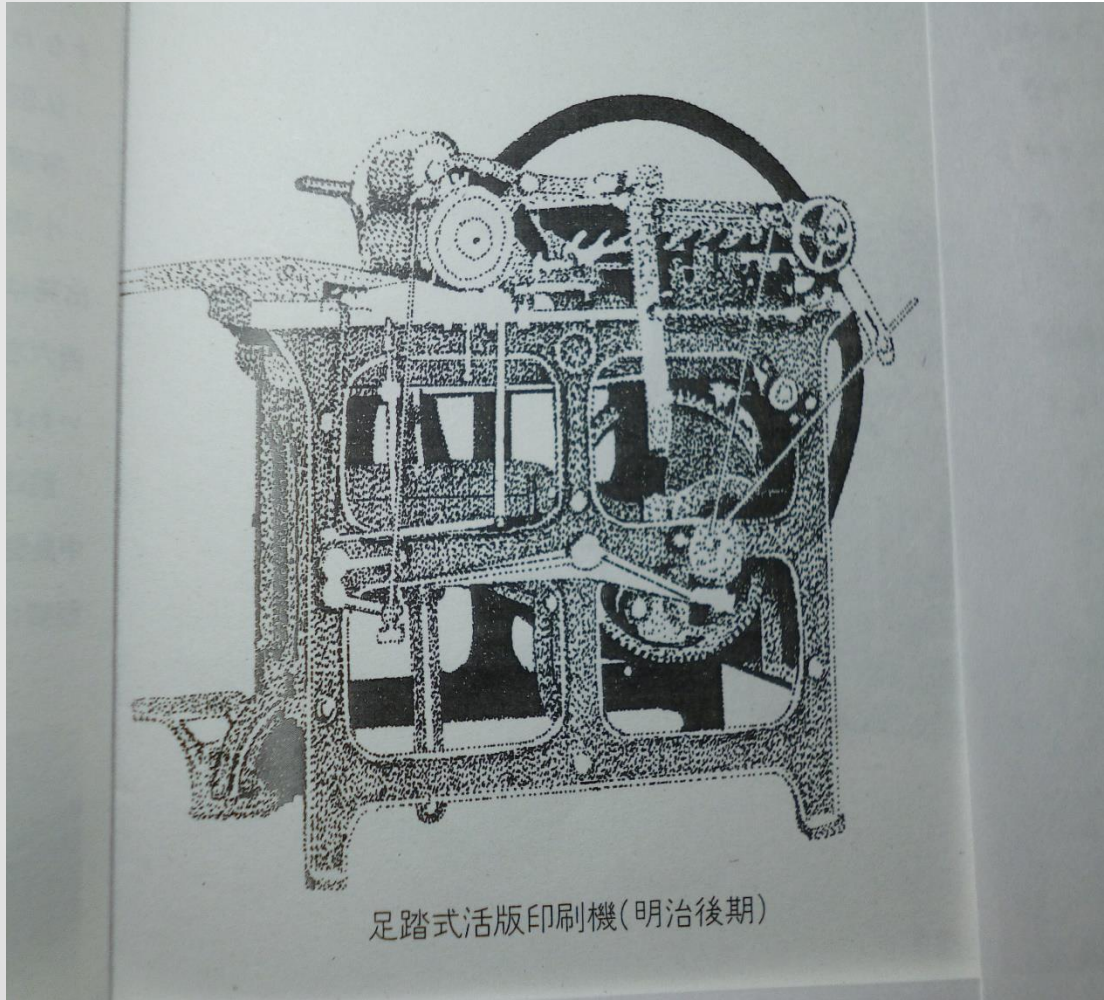
②「クランクモーションを円運動に変え、カウンタシャフトにより天井からベルトで各機械に動力をとった。」
〔印刷製本機械百年史実行委員会1975〕

③「当時の職人は脚絆をつけて旅人のようないでたちで、足踏み式を動かしたものである。

こういうスタイルは関東大震災までは、印刷工場の風景であった。」(田中1999)

※「足踏み式」= 足踏式活版印刷機(→次スライド参照)

→『日語入門』も足踏式印刷機によって印刷された可能性あり



- 足踏式活版印刷機

→上部ローラー部分を紙が通過すると

考えると、現行最大サイズB0版

(= 1,030mm×1,456mm) が

この部分に入るなら機械全体の推

定規模は高さ3m、幅2m以内

- 和成堂の敷地規模を考えると、敷地

工場内に複数の印刷機を設置する

ことは可能

(図版：『印刷製本機会百年史』(1975)：21)

11. 結論

- (1) 外大本と長谷川本 →異なる印刷職人が版組
- (2) 実藤本は長谷川本と同じ印刷職人が版組の可能性
 - ←長谷川本との同一箇所多し
 - ※一部外大本担当印刷職人も版組に関係 ←誤字・欠落の分布からも傍証
- (3) ①3冊とも異なる印刷職人が同じ字形で別々に版組の可能性
 - ②一人の印刷職人が異なる字形で3組以上の版組の可能性
 - 長谷川本、及び実藤本の2箇所の文の欠落から否定されると思量
- (4) 印刷日同一という奥付の記述 = 事務処理上の“建前”
 - 極めて短時間のうちに、但し異なる日に印刷された可能性も残存

12.残された問題

(1) 奥付印刷日の違い

初版：明治三十四年二月三日印刷

再版・四版・六版：明治三十四年二月一日印刷

→何故か？

・考えられる可能性

①再版・四版・六版の日付が誤植である。

②初版の日付が実は誤植(=実際の印刷日は2月1日)であった。

③初版に2月1日印刷版と2月3日印刷版の2種類が存在している(が前者は未確認)。

⇒今後の検討／探索課題

(2) 印刷所の変更

初版：同〔東京〕市麴町区隼町廿二番地 和成堂

再版・四版・六版：同〔東京〕市牛込区市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

秀英舎第一工場(四版のみ「株式会社秀英舎第一工場」)

※現在の大日本印刷株式会社の前身＋本社所在地

→何故か？

・考えられる可能性

①単純な契約の終了

②和成堂の事業継続が困難

③長谷川雄太郎側からの契約解除(初版刊行後に死去→再版契約はいつか？)

⇒今後の検討／調査課題

参考文献

- ・ 池上禎一(1985a)「長谷川雄太郎と広州同文館(上)」『紀要』80 愛知大学国際問題研究所 83-101
- ・ 池上禎一(1985b)「長谷川雄太郎と広州同文館(下)」『紀要』83 愛知大学国際問題研究所 145-165
- ・ 印刷製本機械百年史実行委員会編(1975)『印刷製本機械百年史』全日本印刷製本機械工業会
- ・ 魏維(2016)「清末日本語教育における音声教育についての研究」『日本語教育』164号 日本語教育学会
34-49
- ・ 続三義(2016)「中国の日本語教科書研究－清末の日本語教科書に於ける音声教育－」『経済論集』42巻
1号 東洋大学 123-137
- ・ 田中薫(1999)『書籍と活字－明治以降の書籍印刷における活字の変遷に関する研究－』書肆緑人館
- ・ 谷口知子(2011)「伊澤修二の日本語教材『東語初階』・『東語真伝』」『関西大学東西学術研究所紀要』44
341-355 関西大学東西学術研究所
- ・ 東京郵便局編(1904)『東京市麹町区全図 明治四十年一月調査』大倉書店

- 中村重穂(2015)「長谷川雄太郎研究序説－『日語入門』諸本校異に基づいて－」『北海道大学留学留学生センター紀要』第19号 北海道大学国際本部留学生センター 1-23
- 中村重穂(2016)「長谷川雄太郎研究－『日語楷梯』と『日語入門』草稿の校合に基づいて－」『北海道大学国際教育研究センター紀要』第20号 北海道大学国際連携機構国際教育研究センター 66-80
- 中村重穂(2017)「長谷川雄太郎研究・その2－日本語史的観点から－」『北海道大学国際教育研究センター紀要』第21号 北海道大学国際連携機構国際教育研究センター 14-33
- 横山和雄(1992)『出版文化と印刷－活版から電子印刷まで－』出版ニュース社
- 吉岡英幸(2000)「明治期の日本語教材」木村宗男先生米寿記念論集刊行委員会(2000)『日本語教育史論考－木村宗男先生米寿記念論集－』凡人社 13-25
- 吉岡英幸(2002)「明治期の語法型教材」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』15 早稲田大学日本語研究教育センター 133-146
- 劉建雲(2005)『中国人の日本語学習史－清末の東文学堂－』学術出版会

参考ウェブサイト

- ・「住友不動産のオフィス」ホームページ

<https://office.sumitomo-rd.co.jp/building/detail/chiyoda/hanzoumon>

(2019年8月16日最終閲覧)

ご清聴有り難うございました。